

第3章

doi: 10.18999/bulsea.66.115

中学3年生

石川久美・若山晃治・佐光美穂
亀井千恵子・岡村明

「国際理解と平和—長期的な視野に立って多角的に平和を考える—」

(1) 目的

次の1)～3)を目標として探究学習を行うことによって、社会の中で自分が何をすべきかを国際的な視野に立って考え、判断する力をもつ次世代の担い手を育てることを目指している。

- 1) 過去の戦争・現在起きている戦争について学ぶ。
- 2) 「国際理解と平和」について長期的な視野に立って多角的に考える。
- 3) 平和な世界を築き維持するために、何をすべきかを考える。

(2) 実施方法

最初に、ブレインストーミングとして、「平和を築き維持するために必要なこと」についてのダイヤモンドランキング(第1回)を行い、国際理解・平和を考えるアプローチの方法には多様性があることを学んだ。

4月、5月の休校中には、広島平和記念資料館のホームページ上にある証言者ビデオを見て記録と感想を書くなどの活動を行い、Zoomを利用して意見交換場を設けた。Zoomのみでなく、名古屋大学の課題配信システムであるNUCTを利用した課題の送付・回収を行うことで生徒の課題への取り組みの状況を把握した。

広島での研究旅行が実施できなくなったため、オンラインでできる活動として、名古屋大学の留学生に出身国での平和学習についてインタビューを行った。

9月に入り、名古屋市内の資料館が再開することがわかったため、名古屋市内でのフィールドワーク(FW)を実施することとした。8人ずつのグループに分かれて、班ごとに研究テーマを決めてフィールドワーク場所を探した。2班に一人の指導教員を割り振り、アドバイスをを行った。

各班は事前学習を行った上でフィールドワークに出かけて資料館の方にインタビューを行った。この内容を各クラスで発表し、クラス代表となった班は、他クラスでも発表を行った。フィールドワークで学んだことをクラ

スで発表したり、全員が執筆する研究集録を読んだりすることによってすべての班の研究内容を知ることができた。このことが、「平和」について多角的に考える機会となる。2月にダイヤモンドランキングの2回目を行うことで、各自の考え方の変化を振り返った。

一年の終わりには、平和な世界を築きそれを維持するためには、何が必要であり、そのために、自分は何をすべきかを長期的な視野に立って考え、自分の考えをレポートにまとめた。

昨年度までと同様に、フィールドワークの実施を通し、アポイントの取り方や依頼状・お礼状の書き方、質問事項の考え方など、課題を探究するために必要な方法も身に付ける機会を設けた。

(3) 一年間の授業内容

月	日	曜	授業内容(予定)
4			オリエンテーション(NUCT)
			ダイヤモンドランキング
			—平和な世界を築き維持するための9つの方法—
5	8		課題配布(NUCT)
	20	水	ZOOMにて指導教員別 ダイヤモンドランキング意見交換会
	27	水	ZOOMにて指導教員別 広島事前学習意見交換会 広島平和記念資料館 証言者ビデオ視聴・記録(NUCTで提出) 広島『学習ハンドブック』を配布し記録を書く。(NUCTで提出)
6	22	月	杉原千畝 学習
7	13	月	名古屋大学留学生へのインタビュー 「海外での平和教育」
8	31	月	大久野島毒ガス資料館学習 夏休み課題
9	14	月	映像の世紀「時代は独裁者を求めた」視聴
10	12	月	グループで「平和・国際理解」に関する研究テーマを決める。(8人×10グループ)

			学校から1時間以内で行けるところへのFW計画
	26	月	FWまたはオンラインインタビューの計画 下調べ・質問を考える
11	9	月	FWの計画（オンラインインタビューも可） 下調べ・質問を考える
11	12	木	学校から1時間以内で行ける名古屋市内の場所へのFWまたはオンラインインタビュー 1～4時間目授業 昼食後にFW
11	19	木	FWまたはオンラインインタビュー 1～4時間目授業 昼食後にFW
12	14	月	FW・インタビューのまとめ・集録原稿下書き
12	21	月	集録原稿完成
1	25	月	発表準備
2	8	月	クラス発表
2	22	月	クラス代表発表・ダイヤモンドランキン グ 第2回
3	8	月	「総合人間科を通して考えたこと」レポート作成

(4) 成果と課題

1) 休校中の活動

「平和な世界を築き維持するための9つの方法」を各自で考えたランキング表の作成を課題の一つとした。提出作品の中からパターンの異なるものを数個選んでプリント教材として、各家庭に送付した。特に「軍事力」をどの順位に置いているかに着目して選んだ。自分が考えたこととの共通点や相違点についてZoomで意見交換を行い、各自が考えたことを共有する場を設けた。16人の生徒に対して一人の担当教員という少人数であったため、全員が発言することができた。

広島平和記念資料館を訪れることはできなかったで、ホームページ上にある原爆体験者の講話を動画で見ることができるコンテンツを利用した。休校中に各家庭で動画を視聴してその内容とその話を聞いて考えたことをレポートに書くという課題を出した。名古屋大学のNUCTシステムを利用することによって生徒の課題提出状況を一目で把握することができ、学年の教員全員で共有することができた。

2) 留学生へのインタビュー

名古屋大学に在学している海外滞在経験者の方からお話を聞いた。ベトナム、アメリカ、モンゴルの方と日米両方の国籍を持つ方、日本人ではあるがインターナショナルスクールで教育を受けた方にオンラインでインタ

ビューを行った。特に中学・高等学校での平和教育や歴史の内容について聞いた。下記の生徒のように、原爆投下に対する考え方が自分の予想と異なると感じた生徒もいた。原子爆弾の悲惨さを学んだ後であったため、アメリカの中では、「原爆投下によって終戦できた」と肯定的に考える人が一定数いることに驚いたようで、最後の振り返りレポートで印象に残ったこととして、この取り組みを選んで書いていた。

「海外滞在経験者の話を聞いて、海外から見た日本、平和教育について貴重なことを教えていただいた。例えば、アメリカから見た原爆投下だ。お話を伺った一人は、アメリカ国民の50%は責任があると考えており50%はそうとは思っていないと教えてくれた。」
(感想文中の数値は、留学生の話の中で述べられたおおまかな数値である。)

また、国によって歴史の授業で扱う内容がかなり異なることを知る機会ともなった。対面で話が聞けなかったのは残念であるが、他国では附属学校のような平和教育がほとんど行われていないことも直接聞くことができ、自分たちの学びを改めて考える機会となった。

3) 大久野島毒ガス資料館に関する学習

大久野島を訪ねることはできなかったが、日本の加害について学ぶ大切な場所である。このため、資料館のパンフレットやネット上の資料を配布してワークシートにまとめることで、なぜ大久野島が地図にない島であったのかを学んだ。しかし、現地で遺構や資料館を見ることができなかったため、当時の状況をどこまで理解できたのか把握できない部分がある。

4) 名古屋市内のフィールドワーク

11月12日・19日に実施実施したフィールドワークの訪問先と各班の研究テーマは以下の通りである。

班	テーマ	12日	19日
A1	名古屋空襲	ピース愛知	名古屋城空襲跡地ガイド付き
A2	平和と軍事力	ピース愛知	自衛隊守山
A3	動物と戦争	東山動物園	ピース愛知
A4	どうして戦争を起こすのか	ピース愛知	校内で探究学習
A5	戦争と子どもたちの生活	ピース愛知	愛知・名古屋 戦争に関する資料館
B1	戦争中の子どもたち	愛知・名古屋 戦争に関する資料館	校内で探究学習
B2	戦争と学童疎開	校内で探究学習	愛知・名古屋 戦争に関する資料館
B3	戦時中とメディア	校内で探究学習	ピース愛知

B4	自衛に対する 考え方	ピース愛知	自衛隊守山
B5	名古屋の戦時 中と直後の生 活	愛知・名古屋 戦争に関する 資料館	校内で探究学習

一年の最後に行った振り返りレポートの中で、このフィールドワークが深く考える機会となったと書いている生徒が多かった。次の生徒もその一人である。

「フィールドワークでは『ピースあいち』と『戦争に関する資料館』へ行った。ピースあいちでのお話の中で最も印象に残っているのは、『非平和』という言葉だ。私は“平和”の対義語は“戦争”、“戦争がなければ平和なのだ”と思い込んでいた。確かに、世界各地では今でも戦争が起きているが、日本は1945年以降戦争をしていない。だが、日本は必ずしも平和な国とはいえないと思う。私たちは何も不便なこともなく『平和だなー』と呑気なことを言って生活しているが、貧困や差別に苦しむ人はどうかと考えたとき、彼らは“日本は平和ではない”と言うと考えられる。(中略)“戦争”だけでなく“非平和”も大きな問題として取り上げ、全世界で解決の方向にもっていくことが今後求められると思う。(中略)“平和になればいいね”と口で言うだけではなく、実際に何かのプロジェクトに参加したり意見文をどこかで発表したりするなど、自ら進んで“平和になればいいね”を実現させていくことが重要なのではないかと思った。」

この生徒のように、資料館で実物を見たり、直接説明を聞いたりしたことが、大きなテーマである「国際理解と平和」を考える糸口となったことがうかがえる。また、戦争を伝える仕事に就いている方の姿勢から次のように考える生徒もいた。

「私が一年間を通して考えたことは『戦争』について様々な形で関わる人の強さです。(中略)将来私も後世に戦争の恐ろしさを伝えるために働きたい、そう言えるのはどれぐらいいるのでしょうか。それがきっと少ないのは、誰もが戦争から目を背けたいからです。戦争について深く掘ればどれだけ残酷なことが出てくるか想像がつくからです。そして事実はその想像をはるかに上回ります。だからこそ、自らの道を、戦争を後世に伝えるために、平和のためにささげるのはなかなかできない事だと思います。今回FW先で出会った方々、視聴した動画の方はしっかり向き合い伝えようとする、その人としての強さを実感しました。自分の何の得にもならず、自分が生きている間に解決するかも分からない遠いゴールに向かって進んでいくことができる人々を私は心から尊敬します。」

フィールドワークを受け入れていただけたところも限られた中ではあったが、やはり直接お話を聞くことで本やネットでは学べないことを学んでいることがわかる。

5) クラス発表・学年発表

限られた短い時間内での準備となったが、焼夷弾や戦車の模型を作って発表するなどわかりやすく伝える工夫をしていた。班ごとに訪問先が異なったり、同じ訪問先でもお話をしてくださった方が違ったりしたので発表内容も異なった。このため、生徒たちは真剣に発表を聞いていた。各クラス5班のうち生徒投票で選ばれた2つの班は、他クラスでも発表を行った。発表を聞いた生徒は、発表に対するコメントを書いてフィードバックを行った。

総合学習以外の既存教科でも協同探究する機会を多く設けているため、他の生徒の発言をしっかり聞き、質問できる関係が築かれている。6)の最初に引用した生徒の言葉にもあるように、学んだことをアウトプットしたいという思いは生徒の中にあり、それに対しての反応を受け入れることができていた。例年であれば、広島でのフィールドワークの発表を行っているのに、それができないことが残念である。しかし、準備時間も短く、名古屋市内という制約の中でも学びを深めてくれた様子がレポートから読み取れる。

6) 一年を振り返るレポート作成

「一年の活動を通して考えたこと」、「自分にとって平和とは何か」、「平和の実現のためにすべきこと」について書いてもらった。次の生徒は、調べ学習、フィールドワーク、研究集録、研究発表という多様な取り組みが平和について考えるきっかけとなったと述べている。一年の取り組みでは答えがでない大きなテーマであるが、平和について考え続けようとする姿勢とその土台を身につけることができたと考えられる。

「今まで私の中で平和というのは漠然としていて『平和とは何?』と問われても上手く答えることができなかったと思う。しかし、コロナ禍で学校にこられない時期もあった中で一年間平和学習をしてきて、以前よりも“平和”の核心に近づくことができたのではないかと思った。まだ上手く言葉で表すのは難しいけれど、確実に平和への意識が高まった一年だった。前期の調べ学習で知識を取り入れ、FWでさらに深め、研究集録を書いて研究発表会を行ったことで今までインプットしたものをアウトプットすることができた。この一年で学んだ中で分かった自分なりの“平和”の考えを大切に、これからも平和について考えていきたい。」

次の生徒も大切なことに気づいている。知識を学んだ時に、どれだけ想像できるかで理解の深さが異なる。今後も、このテーマのみでなく、多くの事柄に対して、具体的に想像する力をつけて課題の本質に迫る力を育て続けて欲しい。

「この一年間の総合人間科の多くの時間を原爆について学ぶことに使った。その中で僕は、歴史の授業などで月日や落とされた場所について、テスト勉強した時、昔は何も感じなかったが、今はなんだか心苦しい。それは、第二次世界大戦や第一次世界大戦なども同じで、それがなぜかを考えた時に、広島の被爆体験講話と映像の世紀が頭によぎる。映像として、その現場を見て、始めて世界大戦を『こわい』と感じた。世界大戦や、原爆に実際の被害にあった人、実際に戦場で戦った人、そんな一人一人の感じたものは、多くの人に知られておらず、彼らは何百、何千万人の苦しんだ人としてまとめられて学校で教わる。そんな戦争のおそろしさを語るものが減って、過去の事実としてまとめられると思うとこれでいいのかと思ってしまう。」

次の生徒は、真摯な態度で自分を見つめ直し、自分の考え方の変遷を客観的にとらえている。

「一年を通して考えたことは大きく2つあります。一つ目は、自分がいかに無知なのかということです。一年の中で、戦争について学んできましたが、自分が知らない事実が多くあり、衝撃を受けました。特にヒトラーのことは想像できないような酷いことが行われていて、このようなことは二度と起こしてはいけないと思いました。過去について知ること、これからどのような世界を築くべきか考えていこうと思います。そして過去だけでなく、現在世界でどのようなことが起きているのかを知ることが大切だと思いました。」

2つ目は、自分の考えが周りの環境によっていかに変わるのかということです。一年のはじめと終わりで、考えが大きく変わりました。それは戦争について様々なことを学んだからだだと思います。その変化は良いものなのか、悪いものなのかは判断できませんが、事実を知った上での変化なので自分では納得しています。自分の中にある『本来』の考えに近づいたと思います。これからも様々なことを学び深く考えていきたいです。」

“自分の考え”に固執して異なる考え方を理解することを放棄してしまうと多角的な視野に立って考えることはできない。一方で、あまりに周りの考えに影響を受け過ぎると“自分の考え”を失ってしまう。“自分の考え”を持ちながらも新たな考え方を学び、自らの思考の再構築を行う力が必要である。これは、刻々と変わる現代の課題を他者と協同しながら解決していくために必要な力である。広島研究旅行に行けなかったことによってモチベーションが下がったままになり学びが不十分な生徒もいたが、この一年の取り組みが少しでも「国際理解と平和」を考えるきっかけになってくれればと考えている。

中学3年生という時期は感受性も強く、学んだ内容によって大きく影響を受ける多感な時である。このため、活動内容、使用する資料、見学場所、友人の意見、教員

の伝え方などが生徒の思考に大きく影響を及ぼす可能性がある。このことを再認識しながら、「国際理解と平和」という大きなテーマを考える基盤をつくるための取り組みを模索し続けていきたい。